

辰七十六

諸國名義考

下

291
● 1
2





099
47
155

安

諸國名義考下卷

石見國濱田家人

齋藤彦麻呂誌

北陸道

延喜民部式尔若狹為近國越前加賀能登越中為
中國越後佐渡為遠國とあり西宮記亦くくつ
あり又さとのあり又やまねりちとくあり北山
抄ハハ久流加乃道とあり

若狹

和名抄尔若狹

和加佐國府
在道後郡

名義ハナシと考へ得るも一文字

都知若狹とあり狹は國とつゝ義々延喜神名式尔若狹

○諸國名義考

○下卷

國遠敷郡若狹比古神社二座名神と云ふは此國の坐
ゆゑの神号あり又云く此神より負し國名あり本末と
云ふを或書に引く風土記乃遠文也昔此國有男女為夫
婦共長壽人不知其年數容貌若而如少年後為神今一宮
神是也因茲有若狹之名とありとも云く乃り乃り云きこ
ゆ

越前

和名抄云越前古之乃三知乃又立入信友云京より越前敦賀郡
へ行道云道乃口也此山地あり此國乃古名云かろ
やい乃り名義ハ日本紀纂疏云彼地有坂名曰角鹿行人

必論此坂入越絶故名曰越也とありハ非あり古事記傳
亦山と越て行國なり故乃名と云ハ此方とやありをて
自ら越つと古述とて云云ハ古志ハ令物越と云ありハ
我々物との異あり今世我事亦山川と古須と云ハ誤
なり云々云々云々日本書紀神代卷云越
洲とありと或説云蝦夷地と云ふやハ越國ハそこへ
往來乃道なり故乃名と云ふもいたく強事ありや云れ
きり乃れと越前越中越後加賀能登出羽等ありふて
以ありハ越國亦陸奥と一つき乃國なり類聚三代
拾亦此國面帶大海遠向異方云々と云り日本書紀垂仁

天皇紀額有角人乘一船泊越國筭飯浦云々問之曰何國
人也對曰意富加羅國王之子名都努我阿羅斯等亦名曰
于斯岐阿利叱智于岐云々云々ありありれを外國人來
り調貢多を運び置しゆ名あわら号々けし外國と
しん諸越多を思へを調貢乃品くと越乃國ふ
くくし古事記傳亦越後國古志郡ありをそこし
り出たり名々やんあり又ハ古事記亦於高志前之角鹿
造假宮而坐云々其御祖息長帶日賣命釀待酒以獻爾其
御祖御歌許能美岐波和賀美岐那良受久志能加美登許
余迹伊麻須伊波多須久那美加微能加牟菩岐云々

日本書紀崇神天皇卷亦天皇以大田根子今祭大神是
日活日自舉神酒獻天皇仍歌之曰許能游枳破和餓游枳
那羅駕柳磨等那殊於朋望能農之能介游之游枳云々
あれを久志ハ酒といへるありし記乃應神天皇卷於
大御歌亦須許理賀迦美斯美岐尔和禮惠比迺理許
登那具志尔和禮惠比迺理云々ありし思へを久志
ハ國ありしき論い給へ猶下乃能登國於條亦い
へるありしありし

加賀

和名抄亦加賀國在能天郡名義ハ日本紀畧亦加賀國云々以

地廣人多也。とあると思へば、赫乃國ありて、
くさくさ地多しをなり又思ふも今も此國より鏡磨師
と出るあり鏡も加賀といひたり大和國城下郡鏡作
と加賀都久利といひたり例たり或書ふ四時因有雲以加
賀故赫加賀也やゆふ字あるごとく、妄言なり類聚
三代拾弼弘仁四年二月三日大政官謹奏割越前國江沼
加賀二郡為加賀國云々日本後紀弘仁元年月違ひたり
二郡と割て此國と立らば、く同トくて以部内潤遠民
人愁居也とあり國造本紀ある賀我國造云々難波朝御
代隸越前國嵯峨御世弘仁十年割越前國分為加賀國云

あり立入信友云、舊事本紀、伊勢藩主、女賀具呂姫云々
豐受大神宮、祓宜補任、大若子命一名大藩主命、越國荒
振凶賊阿彦有、不從皇化、取平器、詔云々、
思へば延喜神名式、加賀國能美郡播生神社とあり、
藩主乃誤、亦加賀ハ賀具呂イリ、負一各ふるべし、國造
本紀、加我、國乃次、加宜、國乃次、江沼、國あり、
乃を主と生と又具字と宜字と似たり、字体あり、
さる一字誤あり、むいひたり

能登

和名抄、能登、國府能登郡、能登郡名義、能登郡思ひ得る上乃越前乃條

地廣人多也とありと思へば、赫乃國ありて、
くくく地を水にたり又思ふも今も此國より鏡磨師
と出たりあり鏡とも加賀といひたり大和國城下郡鏡作
と加都久利といひたり例たり或書尔四時因有雲以加
賀故林加賀也やゆふん字亦ありと云言あり類聚
三代拾尔弘仁四年二月三日大政官謹奏割越前國江沼
加賀二郡為加賀國云々日本後紀あり年月違ひとあり
二郡と割て此國と立らりて同トくて以部内潤遠民
人怒居也とあり國造本紀あり賀我國造云々難波朝御
代隸越前國嵯峨御世弘仁十年割越前國分為加賀國也

あり立入、信友云、舊事本紀、尔伊勢藩主、女賀具呂姫云々
豐受、大神宮、祢宜補任、尔大若子、命一名大藩主、命越國荒
振凶賊阿彦有、不從、皇化、取平、尔罷、詔云々、とありと
思へば、延喜神名式、尔加賀國能美郡、生神社とありと
藩主乃誤あり加賀ハ賀具呂イリ賀一各ありて、國造
本紀、尔加我國乃次尔加賀國、乃次尔江沼國ありか
り、を主と生と又具字と宜字と似たり、字体より以
き、一字誤ありとあり

能登

和名抄、尔能登、田所并能登郡、名義、以、思、得、上、乃、越前、乃、條

引古事記傳乃說尔乃強ていしく吞門乃國形
べきら加賀國尔能美郡乃古事記乃須久那美加能
加牟菩岐云日本書紀乃於朋望能農之能介湊之湊
云々也あゝ延喜神名式尔能登國羽咋郡大穴持像石
神社同國能登郡宿那茂神像石神社也あゝ合せ思
く吞所の吞門の弘仁私記尔少茂神是造酒神也
式尔能登郡能登比咩神社又能登生國玉比古神社
乃續日本紀元正天皇養老二年五月乙未割越前國之羽
咋能登鳳至珠洲四郡始置能登國聖武天皇天平十三年
十二月丙戌能登國并越中國孝謙天皇天平寶字元年五
月乙卯能登國依舊分立云々

越中

越後

和名抄尔越中 古記乃三知乃系 越後 古記乃能知乃系 名義ハ上越前
以條尔委く以り續日本紀文武天皇大寶二年三月甲
申分越中國四郡屬越後國云々

佐渡

和名抄尔佐渡 國府在 名義ハ古事記傳尔狹門乃此駕ハ舟
入該水門乃狹き也ハ漏國形とく尋て定むべし
中川頭允ハ海中尔能もく國乃形を誰所乃畧るる

糸引、古事記傳乃說、糸引、強てい、香門乃國形、
べき、加賀國、能美郡、乃古事記、乃須久那美加能、
加牟善岐云、日本書紀、乃於朋望能、能介、能介、能介、能介、
云、やあ、延喜神名式、能登國、羽咋郡、大穴持像石、
神社、同國能登郡、宿那彦神像石、神社、やあ、合せ思、
香門、乃弘仁私記、糸引、少彦神、是造酒神也、
式、能登郡、能登比咩神社、又能登生國、玉比古神社、乃、
了、續日本紀、元正天皇、養老二年、五月、乙未、割越前國之羽、
咋能登、鳳至、珠洲四郡、始置能登國、聖武天皇、天平十三年、
十二月、丙戌、能登國、并越中國、孝謙天皇、天平寶字元年、五、
月、乙卯、能登國、依舊分立、云々

越中

越後

和名抄、糸越中、古事記、三國志、糸越中、和名抄、越後、古事記、三國志、名義、上越前、
糸條、糸委、く、い、續日本紀、文武天皇、大寶二年、三月、甲、
申、分越中國四郡、置越後國、云々

佐渡

和名抄、糸佐渡、國府在、名義、古事記傳、糸、我門、乃此、寫、舟、
入、水門、乃、我、き、あ、痛、國、形、乃、尋、て、定、む、べ、
中川、頭、允、海、中、糸、紋、も、く、國、乃、水、を、維、助、乃、畧、う、さ、ふ

らむと云ふ。續日本紀聖武天皇天平十五年二月辛巳
以佐渡國并越後國孝謙天皇天平勝寶四年九月越後國
佐渡嶋云々同年十一月乙巳復置佐渡國云々

山陰道

延喜氏部式云丹波丹後但馬因幡馬追國伯耆出雲
馬中國石見隱岐為遠國。云々日本書紀成務天皇
卷云山陰曰背面とあり民部省圖假云々山陰陸道
也あり西宮記云々ものあり又かげさも乃阿らヤ
ノノり北山抄云々曾止毛乃道又旧説加介止毛乃
道ノ訓了身麻呂云々加介止毛ノノ兒ノノ謠あり

丹波

和名抄云丹波 丹波國 名義云田庭云々一度會の外宮
乃豐受大神此國云々内宮乃皇大神乃朝夕乃
大御食奉了給上故云云。云々延曆儀式
帳云天照坐皇大神云々大長谷天皇御夢云詔覺賜久吾
高天原坐色見志真岐賜志慮云志都真利坐云然吾一所
耳不坐波甚苦加以大御饌毛安不聞食坐故云丹波國比沼
乃真奈井云坐我御饌都神等由氣大神并我許欲止詔覺
奉支尔時天皇驚悟賜色即從丹波國令行幸氏度會乃山
田原乃下石根云宮柱太知立高天原云比疑高知云宮定

齋仕奉始支是以御饗殿造奉皇天照坐皇大神乃朝乃大
御饗夕大御饗乎日別供奉云々やあるふも朝夕乃大御
饗と主了給ふ神乃坐一國のふ故尔田庭と号々む
庭やふ平めに廣きとつし齋清めととと揃と忌庭之穂や
つしあももうしれ萬葉集乃哥ある海上とつしも庭やふ
とつし

丹後

和名抄尔丹後 本迹成る是如のこ
村田庄在佐野 名義ハ上ホ以つり續日本紀元

明天皇和銅六年夏四月乙未割丹波國五郡始置丹後國
とありとて丹波と前とつしとてたふ尔此國と丹後と

〇此事前後乃例尔たふ

但馬

和名抄尔但馬 本和馬國府
在佐野 名義ハ物國風土記尔但馬國者

往昔黑田大連所領行也山路多而通行在于馬故名連馬
也今謂但馬則其訛也とらと又ハ田路端前後乃中間乃
意うと田路間あてハありとらとらとらとらと云の
又思ふハ橋乃港と麻尔らとらとらと奈と畧きたらとらと
新羅國乃王子天日茅多武皇國尔きたらとこの國尔留
子孫つとらとらと國史尔見えとらと代ハ但馬某と子た
ら中尔田路間守と田路間乃始とらとらと四代以前と

但馬某と号し、後と前ふりくく、國史ふし三、
古事記、玉垣宮段、天皇以三
宅連等之祖名多屏麻毛理、遣常世國、令求登岐士、致能迦
致能木實故、多運摩毛理、遂到其國、採其實、云く是今橋者
也、云く日本書紀、重仁天皇九十年春二月、天皇命田道間
守、遣常世國、令求非時香菓、令謂橋也、云くあり萬葉集、
許余物能已能多知波奈能云く、田道間守常世、和
多利云く、時自久能香久乃菓于云く、橋守守部乃
五十戸之云く、ありありと思へ、田路間守ハ橋守ハ
て、い、姓氏錄、左京諸蕃、新羅乃部ハ橋守三宅
連、同祖、天日持命之後也、云くあり、古事記傳ハ橋
ハ多運、麻花乃、下し、あり、あり、我推量ハ、あり、
へり、連、い、あり

因幡

和名抄ハ因幡 因幡國、古事記、
傳ハ法美部ハ楠羽 伊奈、郷あり、是、出、國ハ名
あり、一、名義ハ楠葉、云く、や出、云く、或、又、問、
云、楠ハ皇國ハむね、給、神号ハあ、給、
云、一、國ハ名ハ楠葉、云く、子、云く、
云、一、國ハ名ハ楠葉、云く、子、云く、

行くくは日向^ヒ向^カトハ國史亦も風土記亦も云々
傳へおれとも直向於日出^ニ立^ルハいつれ乃國ふてもあり
べしと作れども云々ありて是れはもろくし師説乃外
葉といつても云々ありて早けられもろくし師説乃外
亦よく所ぬし延喜神名式亦法美郡手見神社高草郡天
穗日命神社ありと手見はもろく彦火と出見命と云々
ありて云々云々此御名も拙りて負せ奉るあり

伯耆

和名抄亦伯耆

此ハ此國名
在之郡

名義考得之古事記傳亦り第

一と出もろくし云々ありて延喜神名式亦川村郡波伎

神社あり云々云々云々云々此神社ハいつれ乃神と祀
たりあや古語拾遺亦根奉陪侍作篇掃蟹と云々ハ天忍
人命亦りしと云々此神社乃祝部ありと云
きりぬり或書云伊都郡美命と此國で出雲國ハ此
乃北婆山亦奉奉る云々云々母君乃國なりと云々又
或書亦引る風土記亦手見乳足麻乳娘稻田雄八頭之
蛇欲吞之故遣入山中于時母逢來姫曰母來云々故云々
來國後改馬伯耆國云々云々云々の両説ハありて
おもひ

出雲

和名抄示出雲

政聖毛國府
在章字印

各義。此國乃天平五年乃服土

託示所以親出雲者八東水臣津野命詔八雲立銘之故云

ハ雲立出雲ト云々臣津野命ハ須佐之男命ハ四世

乃御孫なりと云詔ハ御祖須佐之男命乃御哥と臣津野

命乃唱へ給ひし事記ふ其速須佐之男命宮可造

作地未出雲國云々自其地寧立臍爾作御歌日夜久毛

都伊豆毛夜幣賀岐都麻基織爾夜幣賀岐都久流曾能夜

幣賀岐衰と云給ひし事此の國未出雲郡あり是則須

賀乃地未出雲詔之吾來此地我御心須賀須賀斯と云給

ひし須賀郷ハ云々云々云々云々云々伊豆毛云

と云々給へて出雲乃字乃義

石見

和名抄示石見

政聖毛國府
在耶賀郡

各義ハ字乃如く云々又ハ石

群の約て云々云々云々云々此國ハ岩多き國云々

ガリ萬葉集示角野經石見之海乃言佐敷久辛乃均有伊

久里余曾云々云々伊久里云々石乃名ヲ云同集示海乃

底澳津伊久里云々云々日本書紀應神天皇御靈小由

羅能斗能斗那訶能異句離耳云々云々給へて山原

道乃俗ハ石久利ト云々給へて伊豆國語云々云々

て此國唐乃崎岩屋山大和國志云々神乃云々云々云々珠亦岩多

群ハナ多ク也ナリ魚ノ小ナリ石ノ群ノ乃ハ約シ轉ラセ乃ハ不レ延喜神名
或ハ小野賀郡石見天豐足柄姬命神社之同郡大祭天石
門彦神社之美濃郡浴羽天石勝命神社亦ハ有レ
亦ハ有レみノ宇山ノ小篠柳野を有石海國乃海邊
之石海國乃海邊之

隱岐

和名抄ハ隱岐於此國府在國小郡各義ハ日本紀纂疏ハ隱岐者與之
義也云ノ此洲在北海之西北ト有レ或書ハ當國在伯耆
出雲石見等之神國也故曰隱岐國云ノ云レ義乃ハ
夫木集ハ立浪ハ鼓の音ト打トハ人トセハ

瀬乃嶋守乃文？日本紀畧ハ延喜六年七月十三日
隱岐國言從坤方猛風高吹天健金草命託宣新羅賊數漢
居北海我為追彼念吹大風者如枕柱木等流著是新羅之
賊船航木者神明所告其徵如此云々云々海中ハ離三
子國乃嶋守乃文？

山陽道

延喜民部式ハ播磨美作備前為近國備中備後為
中國安藝周防長門為遠國ト云々日本書紀成務
天皇卷ハ山陽曰觀面ト云々民部省圖帳ハ山陽
陸道トあり西宮記ハ云々云々又云々

乃らりしや、是り北山抄云く如介止毛乃道又旧
説曾止毛乃道ヤ、是り
鳥取云曾止毛ト
いふことあり

播磨

和名抄云播磨 没里萬國府 在館安郡 名義ハ播磨國風土記云筑原里

土中有井所以名筑原者息長帶日賣命從神國還上之時

御船宿於此村一夜之間生我根高一丈許依名筑原即關

御井故曰針間井也筑原針也佐字小又高一丈許あり

水を搦りあり是を針間井國とつり一と井と畧

き二字ヤ、好字不改なり、是を總國風土

記云、播磨國昔性昔神大日本磐余彥天皇東征之後大

國富命所領行也所号播磨者國所造天下大神大穴持命

與少彥名命巡行天下之御時到座此國海邊詔此國如張

弓國也詔給故云張濱國今云播磨之縁也やんありすと

古事記傳云赤津右衛門集云播磨、來、人、針を

地とぞく云く云ふ、藤原明衡新猿樂記云集諸國土

産云く播磨針と云るやを引て針ありありあり云

きたり

美作

和名抄云美作 美萬佐知四 府在吉東郡 名義ハ、考へ得を強、い

は、美和坂あり、い、あ、く、く、く、く、此國ハ、備前國ノ、

分是くふり昔東郡美和郷あり延喜神名式亦備前國邑
久郡美和神社ありわづらをひらひらうねとちまう
おろくへ美和と云らむと續日本紀元明天皇和銅六
年夏四月乙未割備前國六郡始置夫作國ありその時
美和郷ハかなふ境ありりりり各不履いて美和境を
云らむこれらしおのり強説あり立入信友ハ真鳥郡亦
美甘郷あれど和名抄亦訓法ありり美宇麻ありり又
ハ美万ありり國人亦問まほしりらと美甘坂ありむら
ちもりりり

備前

備中

備後

和名抄亦備前 此比美和 備中 此備前美和 備後 此備前美和
名義ハ黍ふりり因幡ハ稻葉阿波ハ粟ふりり
あり日本書紀應神天皇二十二年秋九月辛巳朔丙戌
幸言備云と御友別參赴之則以其兄等子孫為膳夫而奉
饗焉云と因以割吉備國封其子等也と此奉饗ありり
因幡ハ黍ふりり備後國風土記亦疫隅國社皆北海堂志次
塔神云と兄菴民將來甚貧窮弟將來富饒云と即以粟柄為
座以粟飯等饗奉云と此粟黍と異ふれりりり

ふし遠わくとこ武塔神と連原佐雄神とあり遠須佐
之男神と云ると傳へ誤しあり一延喜神名式不備後
國深津郡根佐能袁能神社あり古事記に大吉備津
日子命與若日子命二柱相副而於針間氷河之前居忌籠
而針間為道也以言和吉備國也云々延喜神名式に備中
國賀夜郡吉備津彦神社名神あり姓氏錄九京皇別不吉
備宿禰大日本根子彦太瓊天皇皇子稚武彦命之後也々
ありありと饗下ありさしこの御名ハ御功尔下
くと國号と原せと稱へ奉るあり一總國風土記不
此國實屯辛亥年執分兩國其後靈龜乙卯年分爲三箇國

安藝

和名抄不安藝四所在 名義、鯉イナ一各あり一一同抄
不鯉イナ魚類也とあり日本書紀仲哀天皇二年夏六月
皇后從角鹿鏡而行之到津田門食於船上時海鯉魚多聚
船傍皇后以酒灌鯉魚鯉魚即醉而浮之時海人多獲其魚
而獻曰聖王所嘗之魚焉故其志之魚至壬六月常頃浮如
醉其是之緣也とありすく神武天皇卷み魚皆浮出隨
氷噴鳴也ありあり同一者あり噴鳴魚口上見也と註也
又詞元集不元と措む心ととたり匡房春とと味浮る
海神あり小浮る魚なりとありとありとありとあり

名也云々の云々のありとせむる

長門

和名抄云長門

長門郡 長門郡 長門郡

名義いもと穴乃如き水門^{ミヅカド}なり

故云孝徳天皇御世マハ穴門^{アナド}と云く其形乃長き故

云後よハ長門^{ナガト}と云くあり古事記傳云長門國と豊前

國之間乃海門あり筑前國乃北面の海とて山陰道乃南

面云入門あり穴門^{アナド}なりと名云負たると云ハ源貞世吟

衛道行あると云ハ物云霜月乃廿九日長門國府を

出て赤馬關^{アカウマノセ}に移り着ゆわ乃山やうやハ麓乃荒磯を

傳ひて早瀬浦^{ハヤセノウラ}云く程云向か乃山ハ豊前國門司關^{カシ}乃

上乃峯なりと云海乃面ハ町やうや云はる瀬乃満干

乃程ハ宇治の甲瀬^{カサセ}と云く猶落瀬^{ユルセ}と云くはる穴門

の豊浦乃都や申侍る事ハ今乃赤間關^{アカマノセ}と門司關^{カシ}なり

ていハ山むつたなり其中云くつら云潮の満干乃路を

うと穴乃やうて侍り其岸乃東西ハ人家志げらる

りて穴^{アナ}乃とてはる其^ミハ皇后乃軍乃御船

通て難うと云くハ御舟とてい後一夜乃程云此穴戸

乃山引分きて今ハ早瀬乃渡りにありぬ此山乃か

西乃海中云よりて嶋と云く此嶋の向いハ柳乃浦を

て昔里内裏^{ウラ}乃たちとて是れ所ありと云く

此穴門乃名於說國人乃古く語傳へしを聞て記せし
ありし云く戸と民戸乃意を思て無てて入るを言
て穴乃如くありし海門や云意ありし物とや云く又内山莫
龍を考ふ云く長門乃櫃浦や豊前の早鞆崎や此間乃海
里人ハ一里ありしや云ふれどもいと近くしてはるあり
五六町ありし離れなきをて此段浦や早鞆と相對あり
兩方此山乃崖崩れ缺く形ありしと云れ亦上代ふ此
處長門や豊前とつきたる岩山ふて其下ハ洞ありて東
西通し潮乃通し道ありて船も往來しむ故穴戸やハ
云なりしべし仲哀天皇紀ハ洞海やありしと云く

宣長按ふ此負世の記せし趣や大うく似たり洞海と云ハ
久伎ハ久具理ル山ノ下乃洞と云く舟の往來し故
石ありしと云く上古事記傳云くやありし荒前風土記ハ鳩棚
縣之東側近有大江口名曰鳩棚水門堪容大船焉從彼通
駕鳥羅澳名曰地門堪容小船焉とあり正字通ハ洞音洞
山一穴也と云く和名抄ハ地山穴似袖和とありて此穴門
乃缺く後ハ長門や云く宜ありし事あり

南海道

延喜氏部式ハ紀伊淡路為近國阿波讃岐為中國
伊豫土佐為遠國やあり西宮記亦云くふし

又みふと乃うそのもちとらり北山抄亦南乃
道やうらり

紀伊

和名抄亦紀伊田舟在名義八木國多と觀字ととく
二字也一好字に改て紀伊とふらり日本書紀神代卷亦
素戔鳴尊師其子五十猛神降於新羅云初五十猛神
天降之時多將樹種而下然不殖轉地盡以持歸遂始自筑
紫丸大八洲國之内莫不播殖而成青山焉所以称五十猛
神為有功之神即紀伊國所在大神是也又拔鬚鬚散之
即成杉又拔散胸毛是成檜尻毛是成披眉毛是成據棒云

于時素戔鳴尊之子號曰五十猛命妹大屋津姬命次抗津
姬命九三神亦能分布木種即奉渡於紀伊國也云々
古事記云々木國大屋毘古神也云々延喜神名式亦
紀伊國各草郡伊太祁留神社名神大月次大屋都比賣神社名神大月次
都麻都比賣神社名神大月次又古語拾遺亦依令天雷命
率手置帆員彦狹知二神之孫以齋斧齋鉏始採山林構立
正殿故其齋令在紀伊國各草郡御木齋香二鄉採材齋部
所居謂之御木造殿齋部所居謂之齋香是其證也云々
木裡詩云漢意カめさく思ひ疑ふ人あくとん
とて神の御うへ人々異ありて奇しく靈くき御徳

リしものるりも尋常乃淺智理屈もを例るる
きにありと既外國の三五曆記云盤古死毛髮為草
木と云ふ所の木種時キナの古事コトは云ふ所のらるる以
かく傳へ誤るる又似る傳へのありしをいやは
きめく月日漢意を送つる人半く此書乃全篇しを得
事りしと既師翁の諸書にしひつくられしを令
りしやと云ふを言ふと云ふはなりとの

淡路

和名抄云淡路阿波知日存名義ハ舊事本紀云即韻吾也也
ありと偽書ありと云ふと云ふはなりとの古傳ありと云

記しし古事記傳云日本書紀應神天皇大御歌云阿
波旆シラ摩マと云ふ名義ハ阿波國ハ波ハ海通ルあり嶋シマ
由ユカウリ云と云ふありと云ふはなりとの同紀同卷云二十二年秋
九月辛巳朔丙戌天皇狩于淡路島是嶋者横海在難波之
西峯巖紛錯陵谷相續芳草蒼蔚長瀾濤シラ云と古事記云
大雀天皇云と坐イ淡路島淡路島是聖歌曰於志シ比ヒ那ナ爾ニ能ネ佐サ
岐由伊傳多知臣和賀久連媛禮琴阿波志摩能其名志摩
阿遲摩能志摩世美由佐氣部志摩美由云と云ふはなりとの
を思ふ阿波道ありと云ふはなりとの

阿波

和名抄云河波河身在名義ハ粟國なり古事記傳云粟ハ日本
書紀神代卷云粟田ヨリハ神武天皇大御我ハ云阿波
布トモ給ヒマシムルハ殊ホ多ク作リ物ナリ故
粟ヨリク出来ル國ナリ故ナリ云々古語拾遺云
肥饒地遣河波國云々云々穀麻と殖むと云々水と肥地
云々云々粟ヨリ云々云々伯耆國風土記云相見郡家
之西北有粟嶋少日子命時粟秀實靈云云故云粟嶋也
云々粟ハ嶋名と云々思ハ云々云々云々
云々云々古事記云粟國謂大宜都比賣云々云々
宜ハ飯字云々食ハ粟云々負ハ名云々云々

讚岐

和名抄云讚岐依如國傳名義ハ古事記傳云古語拾遺云又
手置帆負命之孫造牙等其裔令分在讚岐國每手調庸之
外更八百竿是其事等之證也云々云々延喜臨時祭式云九
梓木千二百四十四竿讚岐國十一月以前差綱丁進納云々
云々是ハ云々思ハ云々竿調國云々云々誠云々云々
云々云々竿と畧さ乃都と鈎是と佐奴岐云々云々玉勝間云々
讚岐國の事記云々書云三野郡竹田村云當國忌部之庄
とて殊勝乃地也秋迦堂屋敷と唱ふ五社大明神云々
社云々村乃氏神ト崇む此村往古貢旗竿八百本上紙

しに令其竹枝先て跡ハ田地とありこれ故尔竹田
村と号とていへる古語拾遺云く若字延喜式ハ柗木
云り云ぬ乃書に旗字といへば誤る云々

伊豫

和名抄尔伊豫伊與國名義ハ古事記傳尔伊豫之二名嶋
阿波讃岐伊余土左の四國と總とる名あり萬葉集尔白
浪乎伊余尔回之云くとありも四國を總て云るとも
是れ一國乃名なるが大名にありくまや筑紫の如く
二名も本より大名ありて一借字ありて二並あり日
本書紀應神天皇卷乃大御歌尔阿波流辞摩異柗敷多那

羅阻阿豆枳辞摩異柗敷多那羅拜豫名辞枳辞摩之摩之
世ハ淡路と小豆島と並べり給りあり此二名
嶋乃事ありて二並て小吉以證あり万葉集ハ二
並抗波乃山とありて此嶋ハ飯依比古や愛比
賣と男女並び建依別と大宜都比賣と男女又並べり
二並といふの事ハ伊豫をも元より乃大名とせし弥の
意ハ彼柗哥の語ハ如く弥二並嶋ありて云々とい
ふれり云々ありてありてありてありてありてありて
國と愛比賣といふありて愛ハ古く延とて云々
云々これを延と云ふありて云々ありて伊ハ發語ありて

イヤハハアツル捨ツトキ物ウツ猶弥二並をキクウツ

土佐

和名抄云土佐国府在長門郡名義云古事記傳云言離乃畧云

ヤリ古事記朝倉宮段云一時天皇登幸葛城之山上云

吾者雖惡事而一言雖善事而一言言離之神葛城之一言

土之大神者也云云續日本紀淡路天皇天平寶字

三年十一月庚子復祠高鴨神於大和國葛城郡高鴨神者

添臣團與其弟中衛將監從五位下賀茂朝臣田守等言昔

大泊瀬天皇獵于葛城山時有老夫每與天皇相逐幸獲天

皇怒之流其人於土佐國先祖所主之神化成老夫被放

逐今或前赴下見此事於是天皇乃遣田守迎之令祠本處ト云云

主神云云高鴨トハ別神云古事記傳云土佐風土記

云有土左高賀茂本社其神名馬一言主尊云々曆録曰云

或説曰云々國記曰云々古事記云々以上風土記の文云々

土記乃説云高賀茂神ト一言主神ト云云ハ混ハ物

云々非云云乃土佐國へ遷ツルル坐マト高賀茂神云

云々云云一言主神云云云云此天皇此山亦神獵乃時

小現云云事乃状云云云云依ヨテ混マハツル云云

云云云云云云云云云云定云云云云云國造

本紀云都佐國造志賀高穴穗朝御代長河北古同祖三島

溝、抗命九世孫小立足尾定賜國造也、あり續日本後紀、
拱津、又長我孫葛城事代主命八世孫忌寸宿禰苗裔也、
あり、高賀茂乃證あり、延喜神名式、尔土佐國土
佐郡葛木男神社葛木呼神社都佐坐神社朝倉神社幡多
郡賀茂神社あり

西海道

延喜民部式、小為、建國あり、民部省圖帳、尔西
海道、あり、西宮記、尔、乃、ち、又、あり、の、ち、
北山抄、あり、西乃道、あり

筑前

筑後

和名抄、筑前

筑紫乃三知乃又
加國府在斯郡

筑後

筑紫乃三知乃又
加國府在斯郡

名義ハ釋日本

紀小説有、四義一云、此地形如木菟之體、故名之也、二云、公
望按、筑後國風土記云、筑後國者木與筑前國合、為一國昔
此兩國之間、山有峻狹、故往來之人所、駕、鞍、轡、視、摩、蓋、土、人
曰、鞍、轡、蓋、之、坂、三云、昔此界上有、庶、狹、神、往來之人半生、半
死、其、數、極、多、目、人、命、盡、神、于、時、筑、紫、君、肥、君、等、石、之、令、筑、紫、
君、等、之、相、獲、依、姬、為、祝、祭、之、自、介、以、降、行、路、之、人、不、被、神、害、
是、以、曰、筑、紫、神、四云、為、葬、其、死、者、代、此、山、木、造、作、棺、與、因、茲
山、木、欲、盡、因、曰、筑、紫、園、後、分、兩、為、前、後、と、あり、四、説、乃、中、尔

人命盡神也云々と古事記傳承舉られてるも有ぬべし
ヤ巧と延喜神名式カ筑前國御笠郡筑紫神社名神あり
万葉集カ馬乃帆抗紫とつりて依て國の
果不人乃行至の極に多水を盡と云うやといひ説あり
宇麻乃都米伊都久須伎波美とありとも同一事カ延喜
祝詞式カ馬帆至留限とありカ又万葉集カ
天皇乃等保能朝廷等之良也日乃筑紫國波安多麻毛流
於佐倍乃城曾等聞食云々とありて見原カ釋名
カハハハ異國ノ賊兵カハハハ防カハハハ見
海濱カ石垣と築せられ故カ築石カハハハ見

て夫木集の菅公乃哥カ指崎也十世の松原石カハハハ
多引世カ蒙古ノ賊兵カ防カハハハ博多ノ濱十三里カ
石垣カ修補せられカ鎌倉北條家カ筑前太
宰少貳カ石垣修補カ旨カハハハ書カハハハ証
文カハハハ日本書紀
天武天皇卷カ筑紫國者元成邊賊之難也其峻城深隍臨
海守者豈カ内賊耶云々續日本紀淡路天皇天平寶字二
年十二月戊申遣新海使小野朝臣田守等奏唐國消息云
天寶十四歲歲次己未十一月九日御史大夫兼范陽節度

使安祿山反，樂兵作亂。云々於是勅太宰府曰：安祿山者，
狂胡狡豎也。遠天起逆，事必不利。疑是不能計西還，更掠於
海東。云々。中云々。軍防令不允。城隍崩頽者，使兵士修理。
若兵士少者，釐役隨近人夫。遂開月修理。其崩頽過多，交關
守固者，隨即修理。役訖，吳錄申大政官。所役人夫皆不得過
十日。

肥前

肥後

和名抄尔肥前

比乃三知乃名
因府在尔城郡

肥後

比乃美知乃名
因府在尔城郡

名義八火國

一々好字尔改ら水りあり日本書紀景行天皇十八年五

月壬辰朔從葦北發船到火國。於是日沒也。夜冥不知著岸。
遙視火光。天皇詔。汝抄者曰。直指火處。因指火性之即得著
岸。天皇問其火光處。曰。何謂邑也。國人對曰。是八代縣豐村
亦華其火。是誰人之火也。然不得主。茲知非人火。故名其國
曰火國。云々。此西國の風土記云々。二説ありて一説は
上の文と同一云々。一々。不異。云々。今一説は昔磯城瑞
蔭宮。御宇御間。城。天皇之世。肥後。圍益城。郡朝來名。峙有土
蜘蛛云々。到於八代郡白髮山。日晚。止宿。其夜虛空有火自
然。燦精々降下。著燒此山云々。火從空下。燒山。亦在火下之
國可名火國。云々。万葉集云々。火の所々。

と云ふ一語ありて日本後紀桓武天皇延暦十八年五月朔
海使外從五位下内藏宿禰加茂麻呂等言歸郷之日海中
夜闇不識所着于時遠有火光尋達其光忽到島濱詰之是
德岐國智夫郡其處無人云々此式不見也此奈麻治
比賣神乃御志と云ふを以て今ハ火燒摧現といふ
事三代實錄清和天皇貞觀九年阿蘇山奇光照耀山震
動崩すと全浙兵制録亦阿蘇山其石無故火起接天偕以
為異云々此水如意宝珠といふを故云々云々といふ
事云々て用ふ多しと似て事ありあはれといふ事
又似て事あり傳子亦管窠自遣東歸也海中遇暴風船

皆没唯寧來船自若時夜風晦冥旅人盡惑莫知所泊望見
有火光輒趣之得為島島無人又無火燼行人咸異焉以為
神火之祐也此ハ神のつゝ事ありりや肥乃國乃海
外て今も然る神の御志と云ふ奇事と云ふ疑むと古
事記傳亦云古事記乃筑紫島と有面四や云て肥國ハ其
一ハ取也俗と國圖を考ふに肥前と肥後とハ海を隔て
て地味と云ふ正しく二ハ分りて面一あり取か
圓形あり故考ふに日本書紀又風土記云々の火國ハ
古事ハ地名云々ハ皆肥後國ハ地あり然るに肥國ハ
云ハ始ハ只肥後乃方の事也肥前乃地也云々筑紫

國の内ありーやー後ふ肥後より属一ふやうむ肥
前ハ筑前筑後ハ地接きて此三國一面一ふ取つべき
國形ふ肥後より清く離せりありき水と水とハ
上代乃くやとさうんハ新へかゝりたるるるふ
かー御く乃くありあり

豊前

豊後

和名抄云豊前 止與久速乃美知乃 豊後 止與久速乃美知乃 名義ハ
又知國府在守都郡 字のふやー豊ハ中くうに富榮義あり日本書紀景行
天皇十二年云く天皇遂幸筑紫到豊前國長岐縣興行宮

而居故号其處曰京也冬十月到碩田國其地形廣大亦巖
因名碩田也とあることハ碩田乃名義と云ふも水と國号
以義ふるく加ふつて此國風土記多く昔者纏向日代官
御宇大足彦天皇詔豊國直等之祖菟名手遣治豊國往到
豊前國中津郡中臣村干時日晚僑宿明日味爽忽有白鳥
從北飛來翔集此村菟名手即勸僕者遣看其鳥化為餅片
時之間更化芋草數千許株花葉冬榮菟名手見之為異歡
喜云化生之芋未曾有見實至德之感乾坤之瑞也既而參
上朝廷舉狀奏已上奉聞天皇於茲歡喜之在即勅菟名手
云天之瑞物地之豊草汝之治國可謂豊國重賜姓曰豊國

皇因曰豐國云々とあり古事記傳亦云々の説ハ云々
といふれなきやうありて云々云々

日向

和名抄亦日向 比字加那 名義ハ日向 比字加那 云々

後世乃音便云々古事記亦天津日子番能逆云々

藝命云々天降坐于紫日向之高十穗之久土布流多氣

云々朝日之直刺國夕日之日照國也云々日本書紀景行

天皇十七年春三月戊戌朔己酉幸于湯縣旋于丹波小野

東望之謂左右曰是國也直向於日出方故号其國曰日向

也とありぬ水正神代云々云々景行天皇

乃御代云々号々云々此國風土記亦見え

たり日本書紀乃文々同ト云々風土記亦曰折郡乃十

穗乃古事と云々志亦曰折郡内知鋪御天津彦火瓊杵

尊天降於日向之高十穗二上峯時天暗冥晝夜不別人物

失道物名難別於茲有土蜘蛛名曰大鉗小鉗二人奏言皇

孫尊以御手拔縮十穗為我投散四方心得開晴于時知大

鉗等所奏擬十穗縮為我投散即天開晴日月照光因曰高

十穗二上峯後人改號知鋪云々日向乃名義云々

云々今世亦二上峯亦登々人雲霧亦云々云々
時亦米を遠て息吹々を忽晴々々云々云々

跡ありきいづ

大隅

和名抄尔大隅 於保海美國 舟在桑原郡 名義ハ日向國內多々西南乃隅

尔差出々々中急に大隅郡ヤ号一ありむ續日本紀元明

天皇和銅六年夏四月己未割日向國肝城贈於大隅始羅

四郡始置大隅國ト云々乃國のニヤ日本書紀天

武天皇十年八月丙戌遣多祢島使人等貢多祢國圖其國

去京五千餘里居筑紫南海中云々々々類聚三代格尔天

長元年九月三日大政官謹奏停多祢島類大隅國事云々

南濱森々無國無敵有損無益云々々々思へる國

乃果あり大隅あり

薩摩

和名抄尔薩摩 散豆 名義ハ幸瀨ありむ古事記尔火照

命此者牟人阿多君之祖云々故火照命者為海佐知昆古

而取轉廣物難狹物云々佐佐知ハ幸尔を得物々々獵

ふとの意あり日本書紀孝德天皇卷尔薩摩之曲々々

萬葉集あり牟人乃薩摩乃迫門平雲居奈須遠毛吾者令

日見鶴鴨トあり續日本紀文武天皇大室二年先建征薩

摩牟人時云々唱更國司等言云々々拾芥抄尔薩摩國

元唱更々あり姓氏錄右京神別尔阿多御手養火關降命

六世孫薩摩若相乘後也。山城神別所阿多牟人富乃須佐利乃命之後也。とあるは、古事記亦熊曾國とありて、此國亦ありて人あり。故乃名ありて。薩摩人鼓川白尾國柱云薩摩と幸嶋乃義ありて。今乃鹿兒島の内海、天孫漁獵一給り。故址ありて。大隅國桑原郡鹿兒嶋神社、彦火と出見命と祀奉るあり。又鹿兒嶋と名も無目籠とて出たりやまきとて又南陸親姓郡亦籠てふ郷ありて。今の薩摩國より西阿多郡川邊郡乃海邊まであり。へて吾田國よりき云くとあり。猶委一にれとてあり。畧きて記一つた國の名義と舉る。

りい

壹岐

和名抄亦壹岐 此國有 名義ハ日本紀纂疏亦壹岐猶言雪也 潮沫如雪色白因此所成也 ありて。ゆゑに古事記傳亦伊伎嶋ハ萬葉集以由言能之麻と見え和名抄亦由伎とありて。ゆゑに古訓と思ふ人あり。日本書紀紀體天皇卷乃歌亦以祇とて。此記 古事記 あり。伊字をかき壹字由乃假字亦ありぬを以て。伊伎とて。事明らる。然るも懷風藻亦伊伎連とて。姓を目錄亦雪連とて。又かの萬葉亦由言ありて。以て思ふ。

○諸國名義考

○下巻 世

亦必由伎も通るゝゆへてき故あり各義と見えたり
故思ふ日本書紀天武天皇卷亦齋忌此云踰既あり
齋忌ハ伊弉伊波布由麻波留由志由豆伊豆より
亦ハ言あり伊ト由ト通るを物も齋忌も古ハ
伊吉ヤル云べしマテこの島ありて神祭坐りて齋忌ハ
事あり多む故乃名ありやゆへ又ハ漢國ハ渡りて先
此亦舟よりえ息止故ハ息の嶋云くハあり彦麻呂云延
喜神名式亦對馬國上縣郡天神多久頭多麻命神社ハ今
佐護郷湊村亦ありて主基社もハ下縣郡多父頭魂
神社ハ今豆殿郷豆殿村亦ありて悠記宮にもいふ

玉勝間亦くえとせとて於國も同じく悠記主基乃事あり
またしもありてと續日本後紀仁明天皇兼和
二年三月己未云く壹岐島遙居海中地勢隘狭人數寡少
難支機急頃年新羅商人來窺不絶非置防人何備非常不
類聚三代格兼和五年七月二十五日云く壹岐島解備此
嶋所設器仗之有誓云く三代實錄清和天皇貞觀十二年
春正月十三日丙寅是日勅充壹岐島置并平糶各二百具
云く海中亦難きと一島あれを常亦あり其備あり
へことと思つて息の嶋ありて知りて和名抄亦壹
岐郡亦鯨伏郷あり此國風土記亦鯨伏在郡西昔若鯨

追鯨走來隱伏故云鯨伏鯨並鯨共化爲石根太一里俗云鯨爲伊佐といつと思つと壹岐ハ鯨來江畧うそふむかひさふも勇魚ふも大魚といつさふれを鯨ハもせよ
アみく鯨ももつと云むハ何れもやあふく勇魚來ヤ
アハベきをかくすを畧き云むもいふもあれぞ其のれさ
さふやいふいふ事ゆれをきくさふさふやいふさ
おくのし

對馬

和名抄云對馬 都之萬國舟在下縣引 名義ハ古事記日本書紀 敏達天皇 國造本紀等云津嶋とありと正字ありと云き日本紀纂疏云對

馬、猶言津島也海津之中所有之嶋也とあり是よりみふ
つと古事記傳云名義ハ萬葉集に毛布祢乃波都流對
馬云くよ史と如く韓國乃性還の舟の泊る津あり嶋あり
とありと云義あり鴨祐之曰大八洲記云按豐玉彦之海
宮乃此嶋也彦火出見尊歌曰飲金都御利軒茂豆句志
唐此也軒茂水禽也一説云軒茂松之名也船船著處此言
津也故為島之號者也といつと漢意云つと云古傳を
破る私言あり海宮ハ彦總出見命乃御世未海陸乃性
來絶つ事ハ國史と云く人誰を云くはつと對馬ハ大
八嶋乃其ラあり今云往來絶つものさや類聚三代格

弘仁四年九月廿九日大政官符應停對馬島史生一員置
新羅譯語一人事右得太宰府餅餌新羅之船來著件島言
語不通來由難審彼此相疑濫加殺害云々又云弘仁十三
年三月二日云々此島僻居溟海之外遙接隣國之界云々
續日本後紀仁明天皇承和十年八月戊寅云々當新羅國
邊有鼓聲傾耳聽之每日三響常候已時其聲發動加以至
于黃昏火更見矣云々文德實錄嘉祥二年二月庚戌云々
此島居海中地近新羅若有機急者何以備不虞云々三代
實錄清和天皇貞觀十二年二月十二日甲午先是太宰府
言對馬島下縣郡人卜部乙屎麻呂為捕鷓鴣向新羅境乙

屎麻呂為新羅國所執縛囚禁于獄乙屎麻呂見彼國梳運
材木構作大船擊鼓吹角箭土習兵乙屎麻呂竊問防授人
答曰為伐取對馬島也乙屎麻呂脫禁出繼獲逃歸云々
三月十六日戊辰從五位下行對馬島守小野朝臣春風云々
軍旅之儲蓄在介胃今曹錡薄助以保侶云々云々ありと
も海中不故是云々一島ありんばはらありふいへるの
ゆゑ對馬乃二字ハ好字を撰きたるありあはるを外國人ハ
言語明らるありさ物ふれを都志麻といへる事々如
乃國人乃口ありハ大難くも都以華といひて對馬乃字
と魏志といふ書ふかき云々云々云々云々云々云々其字

を用られしあまをそふ小野朝臣妹子を外國へ遣はれし
 おかの國人乃曰あまの伊毛古といひて伊牟
 加宇といひて因高乃宇を書て奉りしおやを其字を
 用むて御茶一給むし事日本書紀亦ありしを神代卷
 亦對馬乃字を正字乃如く對馬嶋とありしに誤ありか
 るてハ津嶋の嶋といし嶋乃字のつづふふとありしを

諸國名義考終下卷

三都發行書肆

同	大坂心齋橋	京本能登	同	同	同	同	同	同	江戸芝神明前
敦賀屋彦	敦賀屋九兵衛	錢屋想四郎	須原屋伊八	西城宮弥兵衛	山城屋佐兵衛	須原屋茂兵衛	岡田屋嘉七		
七行	板								

